

内湖と松山地区の歴史

片倉 佳史

台北の歴史をたどる旅。今や人口 260 万を数える大都市に発展した台北の歴史を探ってみよう。その基礎は日本統治時代の半世紀の間に築かれている。今回は台北市北部の内湖と東部の松山の両地区の歩みを紹介してみたい。

台北市北部に位置する内湖区は日本統治時代、内湖庄と呼ばれていた。台北州七星郡に属し、当時は人口が多いわけでもなく、特筆されるような古蹟があるわけでもなかったため、文献などで紹介されることも少なかった。往時を知る古老の話では、一帯は見わたすかぎりの水田が広がっていたという。

しかし、最近は集合住宅や高層ビルが次々に建てられており、台北を代表する新興開発エリアとなっている。MRT 文湖線が開通するまでは、交通面の不便さが指摘されることが多かったが、現在はそれも解消された。現在の人口は約 28 万。台北市全体の約一割をしめている。

内湖という地名には「湖」という文字が入っているが、その由来は湖沼とは関係なく、台湾語（ホーロー語）で「湖」は盆地を意味している。こ

のように地名に「湖」という文字の入ったケースは台湾全土、各地で見られるが、いずれも湖沼とは関係がない。

日本統治時代の役場会議室

現在、内湖には庄役場に付随した会議室が残っている。竣工は 1930（昭和 5）年という記録が残っている。終戦後は講堂として利用されるようになり、名称も中華民国建国の父とされる孫文にちなみ、中山堂と改められていた。現在は内湖区が管理する区民センターとなっているが、頻繁に使用されている様子はない。

この建物の前を走る道路は狭く、それでいて交通量は少くない。そのため、いつ見ても息苦しいような環境に置かれているように思ってしまう。それでも、しばらく立ち止まってこの建物を眺め



旧内湖庄役場会議室。円形窓と水平な庇。幾何学的なデザインが美しい。内湖庄が置かれたのは 1920 年。当時は台北市ではなく、台北州七星郡に属していた。



旧内湖庄役場。旧会議室に隣接する建物は旧内湖庄役場だった。竣工は 1937（昭和 12）年。1983 年からは派出所として使用されていたが、新しい警察署の建物が竣工してからは放置されていた。現在はすでに取り壊されている。

ていると、アールデコ調のデザインがすっきりとした印象を与えており、どことなく涼しげな表情を浮かべているように感じられる。美しく切り立った山型の屋根と、採光を意識して設けられた円形窓、そして、水平な庇といった幾何学的な造型がどことなく愛らしい雰囲気も漂わせている。

現在、台北市はこの建物を古蹟に指定しており、保存を決めている。現在は再整備が検討されており、修復工事中である。

松山の歴史

台北市の東部に位置する松山区もまた、内湖と同様、新興開発エリアとして知られている。ただし、こちらは内湖よりも歴史は古く、清国統治時代末期には基隆と台北を結ぶ鉄道の駅も設けられ



日本統治時代の住所は台北市松山 282、284、285 番地。店舗数は合計 31 軒で、16 軒を獣肉業者が占めていた。元旦と秋の大掃除日以外は無休で、8 日の半休日があるだけだった。



松山市場の管理事務所。木造平屋で、歴史が感じられる建物である。なお、八徳路はかつて基隆と高雄を結ぶ縦貫道路であった。

ていた。

松山の旧名は「錫口」といった。これはケタガラン族の集落名であり、19 世紀初頭に漢字表記が与えられたと推測されている。「松山」となったのは日本統治時代に入ってからで、1920 (大正 9) 年の地名改正時に改められた。もともとは台北州七星郡に属する松山庄が存在していたが、1938 (昭和 13) 年に台北市に編入されることになった。

なお、「松山」の由来については諸説あり、愛媛県の松山市に風景が似ているためとも言われるが、付近の丘陵地帯に松の木が多かったことにちなんだという説が有力である。

日本統治時代の市場建築を訪ねる

公設松山食料品小賣市場。現在は松山市場と呼ばれているこの場所は、地元住民でなければ、ほとんど縁のない歴史建築である。実際に、街並みに埋もれてしまったその姿は、一見したかぎりでは歴史ある建造物には思えない。

ここは日本統治時代に設けられた公設市場で、当初は松山庄市場と呼ばれていた。1939 (昭和 14) 年に刊行された『食料品小賣市場要領』によると、この市場の開設は 1911 (明治 44) 年 6 月 10 日にまで遡る。その後、その管理者が台北庁 (後の台北州) から松山庄へと管理者が変わり、1938 (昭和 13) 年に松山庄が台北市に編入されると、今度は台北市の管轄下に入った。

現在の建物は 1934 (昭和 9) 年に建てられたものである。外観など、すでに改築された部分も多く、古めかしい様子ではない。柱や壁、基礎部分などが、かろうじて古さを感じさせる程度である。しかし、ここが基隆河の積みだして賑わい、物資の集積地であったことは確かで、そういった時代に思いを馳せてみたい。

この建物もかつては撤去される危機に直面して



松山療養所は戦後、国民党政府に接収され、1946年に台湾省立松山療養院となった。家屋は雨漏りがするようで、屋根には鉄板が貼られていた。



松山療養所は戦後、国民党政府に接収され、1946年台湾省立松山療養院となった。玄関には八角形の柱が並び、独特な作りとなっている。台座に貼られていたタイルは一部が剥がれ落ちている。

いた。現在、台北市が整備中の MRT（都市交通システム）松山線の駅建設工事のため、この建物を取り壊す計画があったのだ。しかし、住民の反対と識者の努力によって、2006年2月14日、ここは台北市から古蹟に指定を受けた。つまり、保存が決まったことで悲劇は免れた。現役の市場として活気に満ちた空間なので、観光夜市（ナイトマーケット）を訪れたときにでも、足を運んでみたいスポットである。

結核治療施設の所長官舎

閑静な住宅街の中に日本式の木造家屋が残っている。台北市南港区昆陽街164号。ここは旧台湾総督府松山療養所所長官舎。結核療養所の官舎として建てられた家屋である。

松山療養所は市街地の東のはずれに設けられていた。当時の文献によると、丘の上に位置しており、見晴らしがよかったという。しかし、建物は解体されて久しく、往時を偲ばせるものは残っていない。

この療養所は結核患者の隔離治療施設で、開設

時は台湾唯一のものだった。1915（大正4）年3月に台北州が定員28名の「錫口養生院」を設立。1924年に台北州から台湾総督府に移管され、翌年3月に台湾総督府松山療養所と改名した。1942年には台南にも、結核の療養施設が設けられている。

所長官舎は一部改築されているが、屋内は往年の姿を留めている。当時は数多く見られた和洋折衷様式だが、家屋としての規模はかなり大きい。台北市の資料によれば、敷地は768平方メートル、建坪は196.54平方メートルとなっている。2010年、私は行政院新聞局（当時）の計らいでこの建物の内部を撮影させてもらったが、屋内には増築部分を含めて6間の部屋があった。そして、庭が広く、ゆったりとした配置が印象的だった。

残念ながら、2005年以降、この建物には住む人もなく、長らく放置された状態となっている。立派な作りの玄関も鉄板が打ち付けられている。今後、この建物がどのように扱われていくのかは未定であるという。